



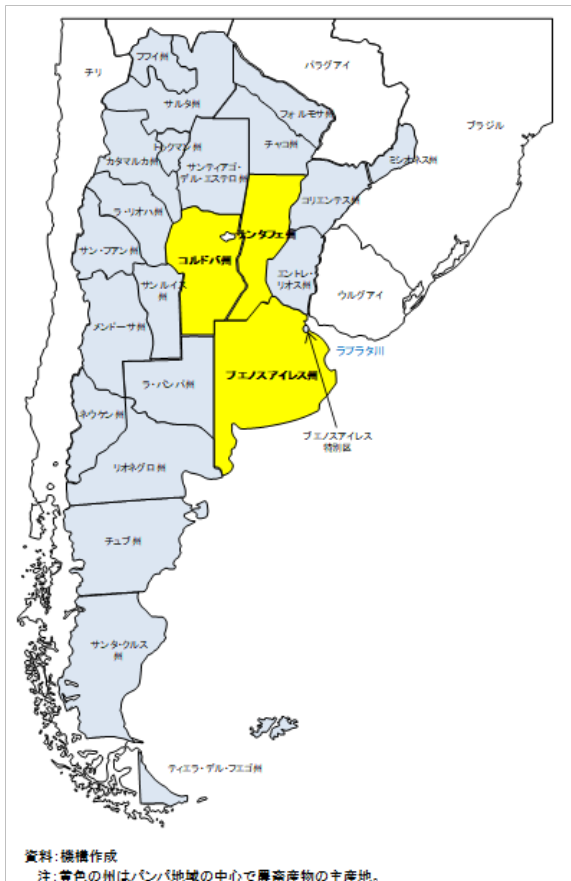
南米[アルゼンチン]

1 農・畜産業の概況

アルゼンチン政府の農牧センサス（2018年）によると、農業経営体25万戸の所有面積は1億5500万ヘクタールで、このうち4650万ヘクタールが農地、1億850万ヘクタールが牧草地として利用されている。ブエノスアイレス州、コルドバ州、サンタフェ州を中心とするパンパ地域は、平たんかつ肥沃な土壌であることに加え、気候も穏やかで降雨にも恵まれており、農畜産物の主産地となっている（図1）。

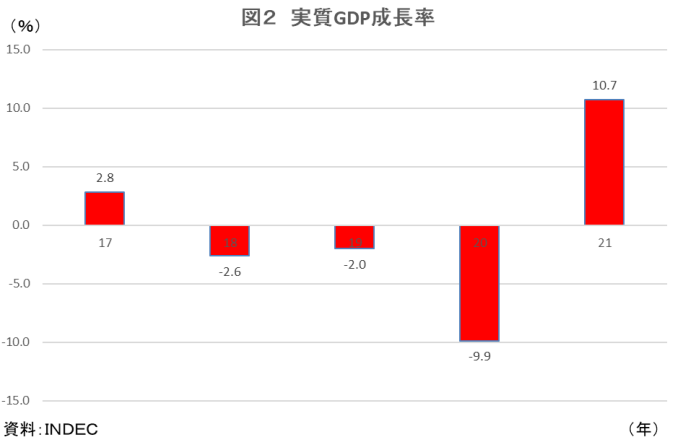
アルゼンチン国内産業に占める農畜産業の比率は国内総生産（GDP）の7%程度であるが、農畜産物輸出額は全輸出額の6～7割を占めており、同国にとって農畜産業は外貨獲得上、極めて重要な産業となっている。

図1 アルゼンチンの行政区分



政策面を見ると、19年12月に発足したアルベルト・フェルナンデス政権は、改革・開放路線の政権運営を行った前政権から一転し、以前の国内優先主義に基づく輸出規制政策を実施した。アルゼンチンでは、18年前半に50年に1度といわれる干ばつの発生から農業生産が大幅に落ち込むとともに、本国通貨の急落など経済が低迷した。フェルナンデス政権発足後の20年は、経済が十分に回復しない中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大から政権はその対応に追われた。21年には、インフレ対策などさまざまな経済対策の法案が提出されたが、11月に行われた国会議員中間選挙で上・下院とも与党連合が過半数割れとなり厳しい政権運営となった。

アルゼンチン国家統計局（INDEC）によると、21年の実質GDP成長率は、前年比10.3%増と4年ぶりにプラス成長となった（図2）。同国では、18年からの景気の低迷に加え、20年はコロナでの厳しい行動制限措置による経済活動の停滞がさらなる景気の悪化を招いたことから、実質GDP成長率は3年連続でマイナス成長となった。21年は、COVID-19の感染拡大による経済停滞の反動でプラス成長に転じた。



2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

アルゼンチンの酪農は、放牧主体でパンパ地域に集中している。主な生乳生産州は、生乳生産量の4割弱を占めるサンタフェ州、次いでコルドバ州（同シェア：3割程度）、ブエノスアイレス州（同2～3割程度）である。乳牛の主要品種はホルスタイン種で、全飼養頭数の9割以上を占めるとされる。

近年では、放牧に加えてトウモロコシなどの飼料穀物を補助的に給与する飼養形態が一般的となっている。一般的に小規模酪農家ほど放牧の割合が高く、規模が大きくなるに従って飼料穀物給与の比率が高くなる。

① 生乳の生産動向

アルゼンチン経済省によると、2021年の生乳生産量は、1155万3300キロリットル（前年比4.0%増）と前年をやや上回り、2年連続の増加となった（表1）。同年は、比較的湿度が低く気温も大きな変動がないなど乳牛の飼養に適した環境となったことや、海外からの乳製品需要が堅調であったことなどが増産に寄与したとされ、これまでの最大であった15年（1206万1000キロリットル）に次ぐ生産量となった。

同国の生乳生産は、春の10月に最も生産量が多くなり、夏場の2～4月にかけて落ち込む傾向にある。21年は、前年に続き年間を通じてすべての月で前年同月を上回った（図3）。

表1 牛乳・乳製品の需給

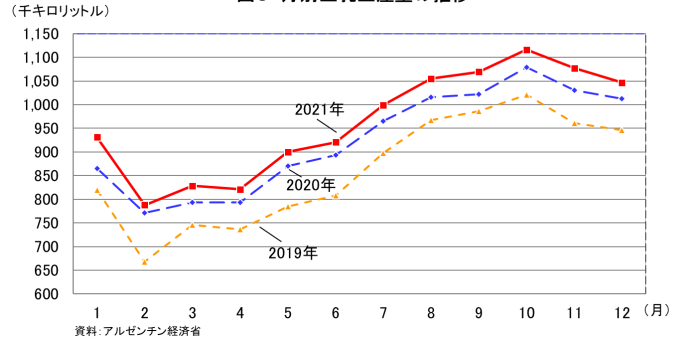
（単位：千キロリットル）

区分	2017	2018	2019	2020	2021
生乳生産量	10,098	10,527	10,343	11,113	11,553
輸出量	1,610	2,322	2,132	2,810	2,833
輸入量	42	63	85	48	71
消費量	8,596	8,436	8,194	8,394	8,634

資料：アルゼンチン経済省

注：数値は生乳換算。

図3 月別生乳生産量の推移



② 牛乳・乳製品の需給動向

2021年の牛乳・乳製品の消費量は、前年比2.9%増の863万4000キロリットルとなった（表1）。

アルゼンチンは、全粉乳の輸出量でニュージーランド、EUに次ぐ世界第3位に位置するなど乳製品の主要輸出国の一つであり、ホエイやチーズの輸出も盛んである。INDECによると、21年の主要乳製品の輸出量は、24万7000トン（前年比6.6%増、製品重量ベース）、輸出額は8億1179万米ドル（同18.9%増）となった（表2）。これは、ブラジルをはじめ海外の堅調な需要や米ドルに対してペソ安で推移した為替相場により価格競争力が高くなったことが挙げられる。品目別では、主力の全粉乳については、最大の輸出先であるアルジェリア向けが大幅に増加し、輸出量全体の8割程度を占めた。

表2 主要乳製品輸出量の推移

（単位：千トン）

区分	2017	2018	2019	2020	2021
全粉乳	72	119	85	126	128
チーズ	45	43	39	45	52
ホエイ	53	46	42	33	40
脱脂粉乳	20	16	14	14	11
バター	3	3	7	13	15
合計	193	227	187	231	247

資料：INDEC

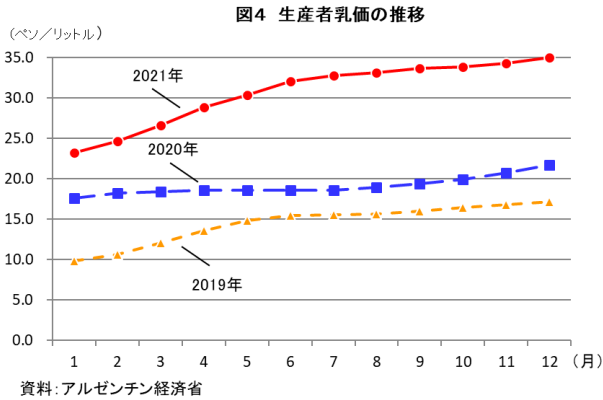
注：製品重量ベース。

③ 牛乳・乳製品の価格動向

2021年の生産者乳価（乳業が生産者に支払う生乳1リットル当たりの価格）は、長らくインフレによる物

価上昇を反映して上昇傾向で推移した。この結果、同年の平均乳価は1リットル当たり30.69ペソ（前年比60.8%高）と前年を大幅に上回った（図4）。

ただし、生産者にとっては、インフレの高進により生産者乳価以上に輸入中心の肥料や飼料などの価格が上昇したことで、収益性は低下した。



（2）肉牛・牛肉産業

アルゼンチンの肉牛生産は、ブエノスアイレス州、サンタフェ州、コルドバ州など肥沃なパンパ地域を中心に、ヨーロッパ系の温帯種であるアングスを主体とし、ヘレフォードやその交雑種による放牧肥育が一般的である。

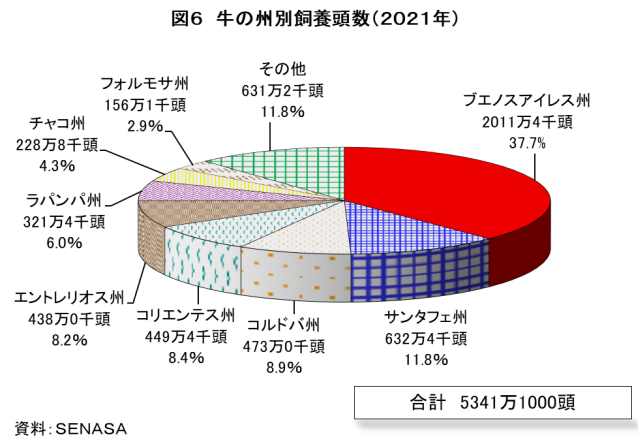
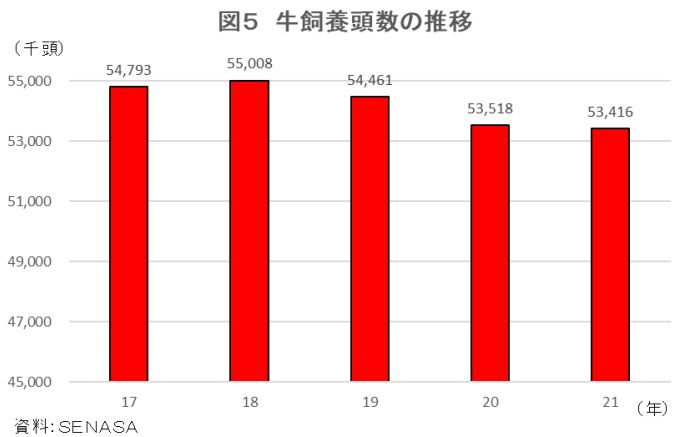
口蹄疫ワクチン非接種清浄地域のステータスに関し、国際獣疫事務局（WOAH）により、これまで南パタゴニア地域と呼ばれるチュブート州、サンタクルス州、ティエラ・デル・フエゴ州に加え、北パタゴニアB地域と呼ばれるリオネグロ州とネウケン州の一部、さらには北パタゴニアA地域と呼ばれるリオネグロ州、ネウケン州、ブエノスアイレス州の一部が認定を受けている。また、残りの地域はすべてワクチン接種清浄地域となっている（23年5月時点）。18年6月には、口蹄疫ワクチン非接種清浄地域から日本向けの牛肉輸出が解禁されている。

また、BSEについては、WOAHより「無視できるリスク」と評価されている（23年5月時点）。

① 牛の飼養動向

国家動植物衛生機構（SENASA）によると、牛飼養頭数（乳用種を含む）は、2012年以降、国内外の

需要回復を受けた価格の上昇により生産者の増頭意欲が増したことでおおむね増加傾向で推移してきた。しかし、国内の景気後退に伴い18年からは減少に転じている。21年の牛飼養頭数は5341万6000頭（前年比0.2%減）と前年並みとなった（図5）。州別では、ブエノスアイレス州が2011万4000頭（全体の37.7%）と最大で、サンタフェ州（11.8%）、コルドバ州（8.9%）の上位3州で全体の6割弱を占めている（図6）。



② 牛肉の需給動向

ア 生産

アルゼンチン経済省によると、2021年のと畜頭数は1298万7000頭（前年比7.3%減）、牛肉生産量（枝肉重量ベース）は298万2000トン（同6.0%減）といずれも5年ぶりに減少した（表3）。これは、良好な牛肉価格を背景に19～20年の経産牛と畜が増加したことで、その後の子牛の出生頭数が少なく、と畜に供する牛群が縮小したためとみられる。

表3 牛肉需給の推移

区分	2017	2018	2019	2020	2021
牛と畜頭数(千頭)	12,616	13,453	13,873	14,008	12,987
生産量(千トン)	2,838	3,054	3,124	3,171	2,982
輸出量(千トン)	313	562	846	903	804
輸出金額(百万米ドル)	1,303	1,982	3,111	2,727	2,790
1人当たり消費量(kg/人/年)	57.3	56.5	51.1	50.3	47.7
去勢牛生体価格(ペソ/kg)	29.5	37.8	64.4	98.1	177.0

資料: アルゼンチン経済省

注: 生産量、輸出量、1人当たり消費量は、枝肉重量ベース。

イ 輸出

INDECによると、2021年の牛肉輸出量(製品重量ベース)は、55万9817トン(前年比8.0%減)と6年ぶりに減少した。一方、輸出金額は、27億3256万米ドル(同2.3%増)と前年をわずかに上回った(表4)。アルゼンチンでは18年以降、財政悪化に伴い為替相場は米ドルに対してペソ安が進み、その後も政情不安などから急激なペソ安が進行した。このような状況に加えCOVID-19の影響で経済状況はさらに悪化し、21年のインフレ率は50%に達した。こうした中、同国政府は21年5月、国内の牛肉価格を抑制し国内消費を回復させるため、牛肉輸出を30日間停止する措置を講じたことが同年の牛肉輸出量の減少につながった。その後、牛肉輸出は再開されたが、一部品目については引き続き輸出禁止措置が継続された。

輸出先別に見ると、全体の約4分の3を占める中国向けは、42万4380トン(同8.5%減)と前年をかなりの程度下回った。同国向けは、近年の経済発展に伴う牛肉需要の拡大や、18年に同国で発生したアフリカ豚熱に伴う代替需要により大幅に増加したが、アルゼンチン政府による牛肉輸出停止措置などの影響により減少に転じた。このほか、18年12月に生鮮牛肉の輸出が再開された米国向けは、年間2万トンの低関税枠を有することで前年を上回った。

表4 牛肉輸出量および輸出額

区分	2021年			前年同期比(増減率)		
	輸出量(トン)	輸出額(千米ドル)	単価(米ドル/トン)	輸出量	輸出額	単価
中国	424,379	1,681,826	3,963	▲8.5%	▲2.4%	6.7%
チリ	33,085	216,923	6,557	2.0%	18.7%	16.4%
イスラエル	30,706	209,352	6,818	11.6%	9.5%	▲1.9%
ドイツ	21,915	229,954	10,493	▲0.1%	16.3%	16.5%
米国	21,130	128,279	6,071	2.6%	30.8%	27.4%
オランダ	12,026	122,370	10,175	▲3.3%	12.8%	16.7%
ブラジル	7,584	61,350	8,089	▲14.0%	▲2.9%	12.9%
イタリア	3,992	42,596	10,670	▲10.4%	4.7%	16.9%
ロシア	1,739	6,676	3,839	▲87.6%	▲84.9%	21.7%
その他	3,261	33,232	10,191	18.8%	50.1%	26.3%
合計	559,817	2,732,559	4,881	▲8.0%	2.3%	11.3%

資料: INDEC

注1: HSコード0201(冷蔵牛肉)、0202(冷凍牛肉)の合計。

注2: 輸出量は製品重量ベース。

注3: 出店が異なるため、表3と数値は異なる。

また、EU向けは、アルゼンチンに対してヒルトン枠(一定基準を満たす骨なし高級牛肉に対するEUの関税割当制度、対象年度は7月1日~翌年6月30日)が割り振られている。2021/22年度のアルゼンチンへの年間割当数量は、ヒルトン枠全体(6万6826トン)のうち2万9500トン(英国向けの1111トンを含む)と最大数量が割り当てられている。このほか、21/22年度のEUのホルモンフリー牛肉(肥育ホルモン剤を投与しない牛由来の牛肉)の輸入に関する無関税割当枠(481枠)2万800トンのうち、アルゼンチンの輸出数量は7101トンとウルグアイに次ぐ数量となった。なお、同枠は20年から米国が切り離されるとともに、26年に1万トンまで段階的に削減されることとなった。

ウ 消費

2021年の1人当たり年間牛肉消費量は前年に続き減少し、47.7キログラム(前年比5.2%減)と50キログラムを割り込んだ(表3)。これは、インフレが進行し経済状況が低迷する中、より安価な鶏肉や豚肉に消費者の志向がシフトしたためとみられる。世界的に見ると、同国の1人当たり年間牛肉消費量は最高水準であるが、17年の57.3キログラムと比較して16.8%減少した。

③ 価格動向

主要な家畜市場であるリニエルス家畜市場の2021年の肥育牛(去勢牛)取引価格は、5月に牛肉輸出停止措置が講じられたことで一時的に下落したものの、インフレの進行などによりペソ建てで見ると20年に続き大幅に上昇した。21年12月の取引価格は、生体1キログラム当たり236.9ペソ(前年同月比65.5%高)となった(図7)。

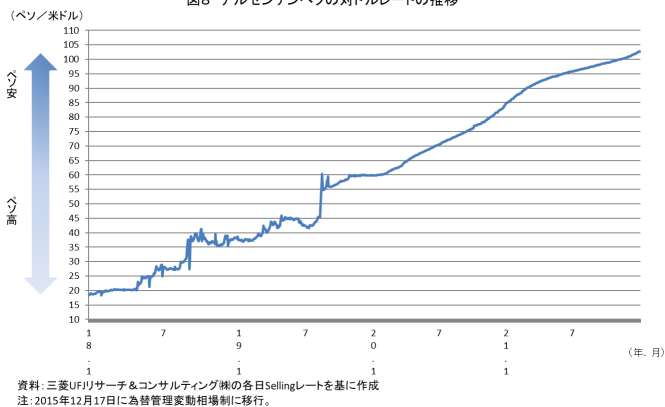
図7 肥育牛(去勢)の出荷価格の推移



3 飼料穀物の動向

米国農務省(USDA)によると、2021/22年度のアルゼンチンのトウモロコシ生産量は、世界の生産量の4.1%を占めた。牛肉生産は放牧が主体であることから、トウモロコシの国内消費は生産量の2割程度と少ない。また、トウモロコシ輸出量の世界貿易量に占める割合は、21/22年度(3月~翌2月)は16.7%となり、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位となっている。同国のトウモロコシ輸出は17年以降、為替相場が米ドルに対して急速なペソ安が進行したことで、価格優位性が増したことや、穀物の堅調な国際価格を背景に、生産・輸出意欲が強いことが背景にあるとみられる(図8)。

図8 アルゼンチンペソの対ドルレートの推移



一方、21/22年度の大豆生産量は、世界の生産量の12.2%程度を占めており、国際市場に一定の影響力を有している。21/22年度(10月~翌9月)の大豆輸出量は、世界貿易量の1.9%とわずかであるが、搾油後の大豆かすの輸出量は世界最大である。トウモロコシと大豆は作付け時期が近いので、それぞれの価格動向が作付面積に影響する。

① 政策 ~政権交代前後の変化~

アルゼンチンの輸出登録制度(ROE)は、国内への食料供給の安定と主要な食料品価格の上昇を抑制するため1976年に導入された制度である。この制度下で、輸出限度数量や輸出許可書の有効期間などが定められていたが、2015年12月のマクリ政権発足後に廃止された。しかし、19年12月に発足したフェルナンデス政権は21年4月、穀物の輸出監視を強化するため、ROEに類似する新たな情報登録措置を導入した。

また、20年1月の通貨切り下げに伴う大幅な税収減を補完するため、通貨切り下げで恩恵を受ける主要輸出農畜産物に対し輸出課徴金制度が設けられた。15年12月に発足したマクリ政権は輸出志向型の政策を推進し、大豆など一部を除き輸出課徴金を撤廃したが、18年の経済状況の悪化によりその見直しを余儀なくされた。輸出規制強化など政策転換を打ち出したフェルナンデス政権は、トウモロコシや大豆などの輸出課徴金の税率を引き上げなど、政府による市場介入の姿勢を強めている。

② 飼料穀物の需給動向

USDAによると、2021/22年度のアルゼンチンのトウモロコシ生産量は4950万トン(前年度比4.8%減)、輸出量は3469万トン(同15.3%減)となった。また、大豆の生産量は4390万トン(同5.0%減)、輸出量は286万トン(同45.0%減)となった(表5)。

表5 主要穀物生産量の推移

(単位:百万トン)

区分/年度		2019/20	2020/21	2021/22
トウモロコシ	生産量	51.00	52.00	49.50
	輸入量	0.00	0.01	0.01
	消費量	13.50	9.50	10.10
	輸出量	36.25	40.94	34.69
	期末在庫	3.62	1.18	1.80
大豆	生産量	48.80	46.20	43.90
	輸入量	4.88	4.82	3.84
	消費量	45.92	40.16	38.83
	輸出量	10.00	5.20	2.86
	期末在庫	26.65	25.06	23.90

資料:USDA

注:年度はトウモロコシは3月～翌2月、大豆は10月～翌9月。

③ 価格動向

生産者販売価格は、南米の乾燥気候、中国の輸入需要の増加、北米の北部地域の高温乾燥気候などの影響により、2020年後半から急上昇した。この結果、21年の穀物1トン当たり生産者販売価格は、トウモロコシが1万9037.2ペソ（前年比76.7%高）、大豆が3万2129.3ペソ（同73.6%高）と、いずれも前年より大幅に上昇した（表6）。

表6 主要穀物の生産者販売価格

(単位:ペソ/トン)

区分	2017	2018	2019	2020	2021
トウモロコシ	2,437.8	4,253.1	6,735.8	10,776.3	19,037.2
大豆	4,158.2	7,527.7	11,351.5	18,509.5	32,129.3

資料:アルゼンチン経済省